端方の収蔵における近代性
―中国書画の海外流出の契機―

下田章平

はじめに

端方（一八六一―一九一一）、字は午橋、満洲正白旗の人、姓は托活洛、号は陶斎（匋斎）・宝華庵。両江総督・直隷総督などを務め、青銅器・書画・碑帖・碑石・古玉・古籍版本の収蔵家として名高い。

端が収蔵で名を馳せた清末は、書画の収蔵が活況を呈した時期である。[1] この時期の政治情勢としては、西太后（一八三五―一九〇八）を中心とする后党と、光緒帝（在位、一八七五―一九〇八）を奉ずる帝党（清流派）に別れて対立していた。前者は李鴻章（一八二三―一九〇一）らの淮軍湘軍閥が軍事を独占し、後者は官吏登用試験である科挙を掌握していた。ゆえに、科挙の試験内容も帝党の学問傾向が反映され、帝党に属して立身出世をはかろうとする者にとって、公羊学・金石学・地理学のいずれかに精通することが必須の条件であった。この中で端を含めて帝党に属して金石学を追究した人々は、青銅器をはじめ、関連する石刻・碑帖・書画・古籍版本を競って収蔵した。また、清末には太平天国の乱、円明園焼き討ち、義和団事件などの度重なる動乱が勃発し、これまで清内府あるいは民間の収蔵家に儲蔵されていたコレクションが市場に供給されたことも活況をもたらした要因となった。

端が官界で本格的に活動する頃にはすでに帝党が没落し、潘祖蔭（一八三〇―一八九〇）・呉大澂（一八三五―一九〇二）・王懿栄（一八四五―一九〇〇）・盛昱（一八五〇―一八九九）といった端と交流のあった著名な収蔵家の多くも没していた。しかし、湖北・湖南巡撫に就任後の端は南方名士から維新を志す象徴的な存在と目され、その金石趣味も手伝って人望を得て、かつて張之洞（一八三七―一九〇九）に仕えていた多くの人物を取り込んで幕府を形成し

た。そして、大官となった端が職権と財力をもとに新出土の文物や、上述の物故した収蔵家らの良質なコレクションを吸収して古今に冠たるコレクションを形成した。さらに楊守敬（一八三九―一九一五）・張祖翼（一八四九―一九一七）・李葆恂（一八五九―一九一五）といった当代一流の鑑定家に評価させ、収蔵目録を編纂するなどコレクションの体系化に努め、清末最大の文物の収蔵家にのし上がった。しかし、辛亥革命での端の横死によって、そのコレクションは散佚した。ちなみに、端の幕客には次代の収蔵家である羅振玉（一八六六―一九四〇）や完顔景賢（一八七五―一九三一）などもおり、ともに収蔵に邁進していた。

端の収蔵に関する研究は端緒についたばかりである。そこで、本稿では端のコレクションの公開、図版の出版刊行、対外情報発信の側面から端の進歩的な収蔵態度について考察したい。このことにより、海外に中国書画が流出した契機の一端が明らかとなるだろう。なお、本稿では引用文献も含めて通行表記に従い、〔　〕には稿者が補足した語句を記し、人物の呼称は略称を用いることにする。

一　コレクションの公開

端は自身のコレクションを賽会（品評会）に出品した。また、種々の事情によって実現されなかったが、私設博物館の建設、日本大博覧会への参加を通じて、国内外にコレクションを公開しようと考えていた。

賽会については、『宗方小太郎日記』[2] 明治四二年三月一日の条に、

……午後井手三郎来訪。家族を伴ひ電車愚園に至り書画、金石、賽会を縦覧す。総督端方の出品に係はる三代の祭器、鼎等の数頗る見る可き者有り。四時帰る。

と記される。これは当時上海に滞在し活動していた宗方小太郎（一八六四―一九二三）が家族とともに訪れた上海愚園の金石書画の賽会で端のコレクションを過眼した記事である。このことは『鄭孝胥日記』にも見える。端に関わる記述は見えないが、少なくとも賽会は一〇日間にわたり行われ、非常に盛況であったようである。[3]

私設博物館の建設に関しては、光緒三三年頃にはすでに構想し、直隷総督として北京に戻った後に琉璃廠の広大な敷地に建設し、宣統三年末の完成を予定していた。[4] 建設中の博物館には友人を招いて展覧することもあったが、同年の端の横死、それに続く辛亥革命の勃発によって建設中止となったと考えられる。

日本大博覧会への参加については、正木直彦『十三松堂

日記[5]』明治四一年四月一七日の条に、

金曜日 晴 出勤 清国漢口在勤正金銀行支店長竹内金平 早崎梗吉氏と共に来訪 南京(ママ)総督端方氏所蔵の金石書画を日本大博覧会に出陳希望に付其旨を日本当局者に伝言すること及金石書画の図録を出版するに付引受方を書肆と協定することの依頼をも受けたりとて余の意見を求めらる 余は一面博覧会当局者に談することと一面審美書院に協商することを約して別れたり

と見える。これは光緒三四年に両江総督の端が日本大博覧会の当局者に自身の金石書画を出陳し、かつ図録の出版を依頼したものである。ここで重要なのは、端が積極的に海外にも収蔵品を公開する意思を持ち、従来の金石書画の目録に飽き足らず、コレクションの図録を作成しようと考えていた点である。日記にある「日本大博覧会」とは明治四五年に事実上の万国博覧会として計画され、同四〇年に準備が開始されたが、財政難のため翌年九月に大正六年開催に延期され、結局明治四五年に無期延期（事実上の中止）になったものである[6]。端は光緒二九年には世界の博覧会に興味を持ち、特に日本の博覧会から影響を受けたという。そして、両江総督の在任中に中国初の博覧会である南洋勧業会を企図している[7]。このように、端は日本開催の博覧会を注視しており、日本大博覧会の開催も関心事の一つであったと見られるが、その事実上の中止、しかも端の横死によって実現されていない。

二　コレクション図版の出版刊行

端はコレクションの影印本を刊行し、美術雑誌に図版を提供している。『増補校碑随筆[8]』方若の原著部分に、

今三本均在托活洛氏、均有石影本。

（今三本均しく托活洛氏〔端〕に在り、均しく石影本有り。）

と見えるように、端は「西岳華山廟碑」（原石亡佚）の「三本」（長垣本・華陰本・四明本）を所蔵し、石印本を作成したという。また、小平総治（一八七六―一九三五）旧蔵の点石斎石印長垣本（個人蔵）に書き入れられた陳毅民国二年跋に、

西岳華山碑石早毀。此長垣本、為海内第一搨本。前清端方、以四千金購得之、時因西法云玻璃版印二千本、流伝嗜古之士、始獲覯真面。

（西岳華山碑の石早(つと)に毀(こぼ)つ。此の長垣本、海内第一の搨本為り。前清の端方、四千金を以て之を購得し、時に西法に云ふ玻璃版に因りて二千本を印し、嗜古の士に流

伝して、始めて真面を覩（み）るを獲たり。）

とある。この跋は偽跋との指摘があるが、清末民初の風聞を伝えたものとしての資料的価値はあろう。[9] これによると、端は玻璃版（コロタイプ）で長垣本二千部を刊行したことになるが、これが上述の私家版、あるいはその複製本である上海有正書局本（刊行年不明）に当たるのかは定かではない。しかしながら、中国の収蔵家で影印による私家版の配布は、すでに劉鶚（一八五七―一九〇九）らに先行事例[10]があるものの、規模の上においては類を見ないものであり、当時の収蔵界にかなりの衝撃を与えたと見られる。すなわち、当時のコロタイプ印刷は、原板の耐久性が低く、一版あたり千部を超えない程度、毛羽立つ宣紙や絹本では三百から五百部程度しか印刷できなかったからである。[11]

また、端は『神州国光集』（光緒三四年二月創刊）にコレクションの図版を提供している。同誌創刊号における鄧実（一八七七―一九五一）の叙には、収蔵家の秘蔵による亡佚を避けるために、影印出版による「美術」（主として金石・書画）の公共的鑑賞、眼福の共有を宣言しており、[12] 図版提供者の端もこの鄧叙の内容に十分理解を示したことが窺える。

三　コレクションの対外情報発信

上述のように、清末は端、あるいはその幕下にあった羅や景賢らが収蔵に邁進した時期であったが、一方、世界に目をむけると、冨田昇氏が指摘するように、ジャポニスムが終焉し、「中国正統美術」が評価され始めた時期にあたる。[13] すなわち、義和団事件以後、中国書画を含む文物が徐々に欧米に向けて流出し、辛亥革命以後に帝室や高官の経済的困窮によって日本を含めた海外へ本格的に流出したことがその要因となっている。また、光緒二五年には甲骨が発見され、さらにイギリスやフランスなどの中央アジアへ派遣された探検隊によって敦煌文献や簡牘などの新出土の文物が大量にもたらされたことによって、中国の文物全般に対する関心は一層高まっていた。さて、当時の多くの大官が排外主義の立場を取っていたが、端は外国人とも積極的に交流し、[14] 次に挙げる訪中した海外の収蔵家や研究者らとも交流している。

（1）ファーガソン（一八六六―一九四五）

端が湖北巡撫在任時の光緒二八年にファーガソン（John C.Ferguson、福開森）が杪禁（へんきん）（メトロポリタン美術

館蔵）を鑑賞している。[15] ファーガソンは、カナダの牧師の家に生まれ、幼少の時にアメリカに移住、一八八六年にワシントン大学を卒業後すぐに宣教師として中国に渡り、匯文書院（南京大学の前身）等を設立し、一八九九年に『新聞報』を創刊するなど、中国で生涯の多くを過ごした。端の新政の顧問として活動し、収蔵方面でも交流を深め、後にアメリカの義和団事件の賠償金を元手に、『歴代著録画目』『歴代著録吉金目』等の専著を完成させている。

（2）犬養毅（一八五五―一九三二）

犬養は岡山県出身の政治家で、字は子遠、号は木堂、内閣総理大臣在任中に五・一五事件で非業の死を遂げたことで知られる。文事にも明るく、漢学の素養を背景として、詩墨を嗜み、刀剣、書画、文房四宝にも一定の鑑識眼を有していた。この端と犬養の交流は、次に引く真島次郎（一八八五―一九二五）筆録の『丁未戊申清国漫遊日記』（犬養木堂記念館蔵）[16] の明治四一年（光緒三三年）一月一一日から同一三日に見える。

一月十一日〔一二月八日〕 土曜　晴　暖

午前七時、蕪湖着。岸に上つて居留地になる所を見る。八時半、出帆。午後一時、南京下関に下船す。直ちに督署に到つて端方を訪問す。午後四時半、領事館に到る。端〔方〕総督答礼に来る。今夜、舩津〔辰一郎〕領事の招きにて総督以下の大官と共に晩餐の饗をうく。出迎者――舩津〔辰一郎〕、早川、古屋、何、鄭、汪。

一月十二日〔一二月九日〕 日曜　雨　暖

端〔方〕総督に贈物す。午前九時、〔舩津辰一郎〕領事の案内にて貢院、夫子廟及明の故宮を見る。正午、商業会議所に於て開かれたる日本人会の歓迎会に臨む。清国文武大員三十余名、同じく招かれて席に在り。端方よりの贈物到る。午後七時、端制台〔端方〕に招待せられて饗をうく。端方秘蔵の古銅器及書画を見る。十時帰館。

一月十三日〔一二月一〇日〕 日曜　雨　寒

午前十時、下関に至つて舩を待つ。舩遂に来らず。蔓舩上に一夜を明かす。見送者――舩津〔辰一郎〕、古屋、松本、何、鄭、汪。

この記事は他の文献にも見えており、[17] これらを統合整理すると、一月一一日の午後一時（一時半とも）に、犬養一行は南京に到着、舩津辰一郎（一八七三―一九四七）領事や端の幕下の三名（委細不明）の出迎えを受け、午後二時半に総督府、午後四時半に領事館を訪問し、この時に端の答礼を受けた。同夜は南京領事主催で犬養を主賓に、端と布

政使を陪賓とする日本料理の歓迎晩餐会が開かれた。一月一二日、犬養は端に贈答品を贈り、午前は舩津らの案内で南京観光に出かけ、正午には商業会議所において犬養の主催で端とその幕僚三〇名、在留日本人名士とともに昼食会を行った。その後端は犬養に答礼品を贈り、午後七時から一〇時まで盛大な晩餐会を開催し、繆荃孫（一八四四―一九一九）を臨席させた上で、秘蔵の古銅器や書画を開陳している。一月一三日は一一日と同じく舩津ら日本人数名と端の幕僚の見送りを受けて上海に向かうことになった。

一二日に端から答礼品が届くが、これはエジプトの古刻の拓本（木雞室蔵）[18]である。犬養の旧外題簽に、

揚本。戊申正月於清国南京木堂題。

（揚本。戊申正月清国南京に於いて木堂題す。）

とあり、「木」朱文円印が押されている。また、端の題に、

埃及五千年古刻揚、奉犬養先生疋鑒。丁未嘉平、端方題。

（埃及五千年の古刻揚、犬養先生の疋鑒に奉ず。丁未嘉平、端方題す。）

とあり、「端方之印」白文方印が押される。端は五大臣の一人として出洋した光緒三三年五月四日から翌日にかけてカイロ観光に出かけているが、このときに象形文字を刻んだ石碑数十点と、王や后の半身像を入手した。[19]したがって、この拓本はカイロで入手し中国に持ち帰った石碑を採拓したものであろう。なお、同種の拓本は孫詒譲（一八四八―一九〇八）や雷悦（一八八二―一九三三）にも贈られており、[20]端の自慢のコレクションであったことが窺える。

また、犬養は同日の午後七時から一〇時まで、盛大な晩餐会に出席し、端のコレクションを過眼している。「古銅器」の委細は不明であるが、書画に関しては、次に示す犬養の観記によってその一斑を窺うことができる。

①「蔡忠恵公謝賜御書表詩巻」（台東区立書道博物館蔵）

戊申正月十二日観。日本東京犬養毅。[21]

（戊申正月十二日に観る。日本東京犬養毅。）

②「黄文節公王史二墓志稿真蹟巻」（東京国立博物館蔵）

明治戊申正月十二日拝観。蓋天下第一墨宝。後学犬養毅。[22]

（明治戊申正月十二日に拝観す。蓋し天下第一の墨宝たり。後学犬養毅。）

③「晋顧愷之洛神図巻」（フーリア美術館蔵）

明治戊申正月拝観。日本備中犬養毅。[23]

（明治戊申正月拝観す。日本備中犬養毅。）

これらは端の未刊の書画目録である『壬寅消夏録』[24]に収録

（①は第二冊、②は第三冊、③は第一冊）されており、端がコレクション中の優品と見なしたものである。

以上のように、端と犬養の交流は光緒三三年の数日に限られるが、端は犬養の歓送迎に幕僚三名を使わし、自らも三度も食事をともにするほど異例の歓待ぶりを示している。また、端は後述のペリオと同じく、犬養の金石書画の鑑識眼を認めている。つまり、犬養の金石書画の趣味を事前に理解した上で答礼品に拓本を選定し、一二日の晩餐会には書画碑帖や古籍版本の鑑定家であり、上掲『壬寅消夏録』の審定にも携わった繆を陪席させた上で、犬養にコレクションの優品に観記を記すことを依頼しているからである。ちなみに、端は観記を含む題跋類の書は、金石書画に精通した自身の幕客を中心とする鑑定家に記させるのが通例であり、一定の鑑識眼がなければ記すことを許されなかったようである。[25]

従来、端と日本人との収蔵をめぐる交流は、内藤や滝が端緒と見られてきたが（後述）、犬養がそれに先行することが明らかとなった。内藤は明治四三年以前にも訪中しているが、管見の限りでは端との交流は確認されず、加えて内藤は端と懇意にしていた羅とも金石に関する歓談を行っているが、この段階で羅から端に関する情報は得ていなかったようである。[26] ゆえに、内藤らの調査の契機は懇意にしていた犬養の第二回訪中の情報によるものと思われる。

（3）ペリオ（一八七八―一九四五）

ペリオ（Paul Pelliot、伯希和）はパリ出身の東洋学者であり、学術的価値の高い敦煌文献をフランスに将来したことで著名であり、二度にわたり端を訪問している。[27] 一九〇八年（光緒三四年）には外交ルートを通じて端と接触し、古銅器を中心に鑑賞して写真撮影も行った。また、収蔵家の裴景福（一八五四―？）のコレクションの撮影や繆が総弁を務める江南図書館で古籍版本も閲覧した。この時繆はペリオから敦煌文献入手の話を聞いていたが、注視しなかった。翌年六月、ペリオは再び端のもとを訪問し、端が五大臣の一人として出洋した時にベルリン博物館で採拓した「沮渠安周造像碑」（中国国家図書館蔵）にフランス語で題跋を記し、持参した敦煌文献を端に示した。端はそれに驚愕し、敦煌文献の回収に努めたが果たせず、すぐに学部にいた羅に伝え、蔵経窟に残存した古書を回収させた。ちなみに、端は光緒二五年に敦煌の千仏洞から出土した観音図（北宋の開宝八年）を収蔵しており、敦煌の将来品にも関心があったことが窺われる。[28]

（4）フーリア（一八五六―一九一九）

フーリア（Charles Lang Freer、弗里爾）はアメリカのキングストン出身の実業家であり、東洋美術の収蔵家として名高く、一九〇九年（宣統元年）と翌年に端のもとを訪問した。そのコレクションを見て、「……それはそれまでに見た最上のものであり、端方氏は、それまで会った最も鋭敏な最も有能な収集家である」と述べている。[29]

（5）内藤湖南（一八六六―一九三四）らの調査団一行

明治四三年（宣統二年）、敦煌出土の古書調査のために、京都帝国大学文科大学の内藤・狩野直喜（一八六八―一九四七）・小川琢治（一八七〇―一九四一）の三教授と富岡謙蔵（一八七三―一九一八）・浜田耕作（一八八一―一九三八）の二講師が北京に派遣され、この時に端のコレクションの調査も附随して行われた。経緯は不明であるが、滝精一（一八七三―一九四五）も同行して調査を行い、さらに景賢と羅のコレクションの調査も別に行った。

ところで、上述の端と交流した海外の収蔵家や研究者らによって、端のコレクションの情報が海外へ発信された。例えば、端のコレクションを調査した滝は、帰国後の明治四三年九月一〇日に国華社で開かれた展覧会に、調査の折に撮影した端や景賢らのコレクションの写真を原寸大に引き延ばしにした上で展覧すると同時に、『国華』第二五〇号（明治四四年三月）から順次解説付きで掲載し、「端方氏所蔵の古美術」（『国華』二五〇、一九一一、二四九―二五二頁）を発表した。また、内藤らは明治四四年二月五日付の『大阪毎日新聞』の日曜附録に、「京都文科大学清国派遣教授報告展覧会号」と題した記事を報告した。[30]

四　中国書画の保全と海外流出

端がコレクションを公開し、図版の出版刊行や対外情報を発信した意図は、中国書画の保全にあったと見られる。光緒三三年、陸氏皕宋楼・十万巻楼・守先閣の蔵書が岩崎弥之助（一八五一―一九〇八）に売却された。同じ頃、銭塘の丁氏八千巻楼の蔵書も散佚の危機にあった。端は繆の進言を受けてその蔵書を購入し、同年、「公共」の図書館（江南図書館）に収蔵することでその保全に努めた。[31] 端は中国書画も丁氏の蔵書と同様に、自身の私設博物館に収蔵し、「公共的鑑賞」や「眼福の共有」（上掲『神州国光集』鄧叙）によって散佚を防ぎ、中国国内での保全に努めようと考えていたのであろう。

一方、端の進歩的な収蔵態度は中国書画の海外流出を促す契機にもなった。すなわち、辛亥革命で端が横死すると、すでにそのコレクション情報を得ていた海外の収蔵家らによって、特に『壬寅消夏録』収載の優品が購入されたからである。

最初に端のコレクションに着目したのは『国華』誌創刊者の岡倉覚三（一八六三―一九一三）であり、一九一二年（民国元年）にボストン美術館の美術品の買い付けのために訪中した。端の葬儀が終わるまではコレクションの売買が行われないとの情報に接したためその購入を断念したが、同じく『国華』誌に紹介された景賢のコレクションをかわりに購入した。[32]

その後、端のコレクションはその遺族によって整理され、国内外に売却される。[33] 海外へ売却されたものには、端旧蔵の上掲「蔡忠恵公謝賜御書表詩巻」がある。この詩巻は端の遺族によって大正八年六月七日に文求堂主人の田中慶太郎（一八八〇―一九五一）を介して中村不折（一八六六―一九四三）に売却されたことが確認されている。[34] ゆえに、下記に挙げるコレクションも購入時期から考えて、端の遺族によって売却されたものと推定される。上掲「晋顧愷之洛神図巻」は一九一四年、「伝郭熙谿山秋霽図」（『壬寅消夏録』未収）と「李伯時蜀川図巻」（同前第四冊）は一九一六年にフーリアによって購入され、「柉禁」は一九二四年にかつて交流のあったファーガソンの手を経てメトロポリタン美術館に購入された。[35] このほかに、上掲「黄文節公王史二墓志稿真蹟巻」は附載の羅跋などによって大正六年頃に林熊光（字は朗庵、一八九七―一九七一）により入手されたことが判明している。

なお、特に古書画は文物の売買価格の中でも高額であり、[36] 中国国内市場だけでは受け入れが難しく、売却先を海外へ求めたことも海外流出の要因の一つとして指摘しておきたい。

おわりに

本稿では、端のコレクションの公開、図版の出版刊行、対外情報発信の側面から端の進歩的な収蔵態度について考察した。このような端の態度は、ファーガソンとの交流によって、少なくとも湖北巡撫在任時より見られることが明らかとなった。また、端は中国書画を自身の私設博物館に収蔵し、「公共的鑑賞」や「眼福の共有」によって散佚を防ぎ、中国国内での保全に努めようとしたが、一方で端の進歩的な収蔵態度は中国書画の海外流出を促す契機にもな

った。すなわち、辛亥革命で端が横死すると、すでにそのコレクション情報を得ていた海外の収蔵家らによって、特に『壬寅消夏録』収載の優品が購入されたからである。

この中国書画の海外流出は、中国国内でのその保全を考えていた端にとってはおそらく意図したものでなかったが、中国書画の保全という観点から見れば高く評価できよう。端のコレクションが売却された民国期は、辛亥革命による王朝体制の崩壊を契機として、清の宗室や高官のもとから夥しい書画を含めた文物が放出された時期であった。[37] このような状況のもとで、端旧蔵の中国書画が海外のしかるべき収蔵家（収蔵機関）に購入され、今日までその命脈を保つことができたのは、清末に端が当代一流の鑑定家に自身のコレクションを評価させ、その信頼すべき情報を海外へ発信させていたからに他ならない。

なお、本稿で論じた中国書画が海外へ流出した契機はその一端にすぎず、同時期の他の収蔵家の動向も含めてさらに考察する必要がある。今後の検討課題としたい。

注

（1）以下、清末収蔵界の動向と端の収蔵については、浅原達郎「『熱中』の人―端方伝―（一）」（『泉屋博古館紀要』四、一九八七、六四―七六頁。以下続刊に（二）〔同前六、一九九〇、五四―八一頁〕・（三）〔同前七、一九九一、二三―四七頁〕・（四）〔同前八、一九九二、五四―八一頁〕・（五）〔同前九、一九九三、八六―一一二頁〕・（六）〔同前一〇、一九九四、六九―八九頁〕・（七）〔同前、一九九五、一〇一―一三三頁〕）、中村伸夫『中国近代の書人たち』（二玄社、二〇〇〇、一七四―一七七頁）、菅野智明「上海図書館蔵『匋斎蔵碑跋尾』」（『中国近現代文化研究』一一、二〇一〇、一―四三頁）、拙稿「民国期における完顔景賢の書画碑帖の収蔵について」（同前、四四―八三頁）参照。

（2）大里浩秋「宗方小太郎日記，明治41～42年」、『人文学研究所報』五〇、神奈川大学人文学研究所、二〇一三、一一五―一六九頁。なお「，」は「、」に改めた。

（3）労祖徳整理『鄭孝胥日記』（中華書局、一九九三）宣統元年一月二九日の条に、「……午後、詣南洋路、至愚園観金石書画賽会議事。」、同年二月九日の条に、「……午後、偕稚辛・伯安同至愚園観書画賽会、游人甚多、逢余寿平。」とある。

（4）以下、端の博物館に関しては、張海林『端方与清末新政』（南京大学出版社、二〇〇七、五〇九―五一四頁）、拙稿「第二期における完顔景賢の書画碑帖の収蔵について」（石田肇教授退休記念事業会編『金壺集―石田肇教授退休記念金石書学論叢―』、同会、二〇一三、二六四―二七八頁）参照。

（5）中央公論美術出版、一九六五。

（6）長瀬昭之助「幻の日本大博覧会」（『古地図研究』三〇二、

一九九六、二〇―三一頁）、古川隆久「日本大博覧会計画について」（『横浜市立大学論叢』人文科学系列第四八巻第一号、一九九七、八三―一一〇頁）。

（7）実際の開催は端が直隷総督に転任後である。前掲注（4）張氏論考（三一一―三二九頁）、朱英「端方与南洋勧業会」（馬敏『博覧会与近代中国』、華中師範大学出版社、二〇一〇、四〇七―四一一頁。初出は『史学月刊』一九八八年第一期）。

（8）上海書画出版社、一九八一、八一―八三頁。

（9）陳跋の直後に、「羅叔言先生見陳毅書評曰、『是不似陳毅真筆』」。想陳氏使他人書者邪。」という小平の赤ペンの書き入れがある。本書は小平が満洲国の内務官在任中に贈呈されたものであり、近くに羅がいたために、陳跋の真贋を尋ねたのであろう。なお、小平は外交官で碑帖の収蔵家として著名である。植野武雄編『本館所蔵小平文庫目録』（満鉄奉天図書館、一九四二）参照。陳（一八七三―?）の字は士可、湖北黄陂の人。蔵書家として著名である。

（10）坂田玄翔「清末・民国時代の影印本について」、『季刊墨スペシャル』二一　碑法帖・拓本入門、芸術新聞社、一九九四、一七六―一七九頁。

（11）范慕韓主編『中国印刷近代史』、印刷工業出版社、一九九五、五七〇―五七一頁。

（12）菅野智明「筆写文字資料の影印に対する近代的認識の一斑―鄧実の出版活動を中心に―」、『中国近現代文化研究』一五、二〇一四、五一―八五頁。

（13）以下、海外流出文物の動向は、冨田昇『流転 清朝秘宝』（日本放送出版協会、二〇〇二、二五四―二七〇頁）参照。

（14）前掲注（4）張氏論考（四五八―四七四頁）。

（15）以下、ファーガソンについては、前掲注（1）浅原氏論考（五）、前掲注（4）張氏論考（四五八―四七四頁）、「出版説明」（福開森・容庚編『歴代著録画目正続編』、北京図書館出版社、二〇〇七、一―三頁）参照。

（16）拙稿「真島次郎『丁未戊申清国漫遊日記』―犬養毅の第二次訪中（一九〇七―一九〇八）記録―」（『中国近現代文化研究』一六、二〇一五、七九―一〇六頁）による。ただし注番号は省略した。

（17）在華日本紡績同業界編『舩津辰一郎』（東邦研究会、一九五八、一〇三―一〇四頁）、繆荃孫『芸風老人日記』光緒三三年一二月九日の条（張廷銀・朱玉麒主編『繆荃孫全集　日記』二、鳳凰出版社、二〇一四）、『木堂家信』中の日露戦後遊歴巻（『新編犬養木堂書簡集』、岡山県郷土文化財団、一九九二、二七三―二七四頁）。

（18）二〇一三年一一月四日に実見調査。伊藤滋編『游墨春秋』（日本習字普及協会、二〇〇二、二四〇頁）所収。

（19）前掲注（1）浅原氏論考（七）。なお、前掲注（1）菅野氏論考に、「……端が欧米視察の前に張［祖翼］との対面を果たしていたならば、端のエジプト古碑入手には、当然、張の経験に基づく情報提供があったに違いない。」とある。

（20）前掲注（1）浅原氏論考（五）。また「埃及（エジプト）の壁画拓本」（目

録番号一一八、早稲田大学会津八一記念博物館蔵池部政次コレクション）の端跋には、「埃及五千年古刻搨、奉怡父茂才方家鑒。匋父端方題記。」とあり、「匋父」朱文方印が押される。そして雷跋には、「陶斎尚書貽余埃及古刻、不下数十幅、均為友人索去、此留篋中。日本池部襄臣星俟、金石賞鑒家也。援宝剣烈士之義、即以奉贈。甲寅伏日怡父雷悦。」とあり、「雷悦印信」白文方印、「彝父」朱文方印が押される。

(21)『尚意競艶―宋時代の書―』、公益財団法人台東区芸術文化財団、二〇一二、一〇頁。

(22) 中田勇次郎『黄庭堅』、二玄社、一九九四、二九頁。

(23)「洛神図」（F1914.53、『フーリア美術館公式ウェブサイト』、二〇一五年二月二八日現在）。
http://www.asia.si.edu/SongYuan/F1914.53/F1914.53.asp
なお、横浜正金銀行関係者の観記も見えるが、これは端が借款の締結を称して記させたのだろう。

(24) 端方輯・繆荃孫批注『壬寅消夏録』全二四冊、文物出版社、二〇〇四。なお、本稿掲載の端のコレクションの呼称はこれに基づく。

(25) 端の幕下の鑑定家については前掲注（1）菅野氏論考参照。管見の限りにおいて、端と親密な交友関係にあった景賢は時々端のコレクションを過眼しているが、それに題跋類を書き入れた形跡はない。

(26) 内藤虎次郎『支那漫遊燕山楚水』、博文館、一九〇〇、一八七―一九〇頁。

(27) 以下、ペリオにについては、前掲注（4）張氏論考（四五八―四七四頁）、徐俊「伯希和劫経早期伝播史事雑考―羅振玉題跋《鳴沙石室秘籍景本》及其他」（黄正建主編『中国社会科学院敦煌学回顧与前瞻学術研討会論文集』、上海世紀出版股份有限公司・上海古籍出版社、二〇一二、四六―五九頁）参照。

(28) 滝精一「端方氏所蔵の古美術」、『国華』二五〇、一九一一、二四九―二五二頁。

(29) ジョン・A・ポープ、トーマス・ロートン「序」、フーリア美術館編『世界の美術館』三四 フーリア美術館、講談社、一九七三、九―一三頁。なお、「序」に指摘のあるフーリアの日記は、二〇一一年一〇月二三日に来日中のララ・ネティング氏（メトロポリタン美術館）に伺ったところ、日記は現存するものの、かなり草卒に書かれているために判読できない箇所が多いという。

(30) 委細は、前掲注（1）拙稿、陶徳民「論文 内藤湖南における中国趣味の形成とその影響」（同編『内藤湖南と清人書画―関西大学図書館内藤文庫所蔵品集―』、関西大学出版部、二〇〇九、一六四―一九二頁）、久世夏奈子『国華』にみる新来の中国絵画―近代日本における中国美術観の一事例として―」（『国華』一三九五、二〇一二、五―一七頁）参照。

(31) 楊洪升『繆荃孫研究』、上海世紀出版股份有限公司・上海古籍出版社、二〇〇八、一九五―二〇二頁。

(32) 前掲注（1）拙稿。

(33) 中国国内の売却に関しては、前掲注（1）拙稿参照。
(34) 鍋島稲子「蔡襄筆『楷書謝賜御書詩表巻』について」、前掲注（21）『尚意競艶―宋時代の書―』、七一―七二頁。
(35) 前掲注（1）浅原氏論考（五）、前掲注（13）冨田氏論考（二七九―二八一頁）。
(36) 例えば民国元年に景賢は蘇軾「黄州寒食詩巻」（台北故宮博物院蔵）等の書画・古籍版本を一万二千元で購入している。前掲注（1）拙稿参照。また、山中定次郎（一八六六―一九三六）は恭親王コレクションを「一括購入」したことで著名であるが、書画類を除いた購入であったこともそれを物語っている。前掲注（13）冨田氏論考（一〇八―一一五頁）。
(37) 前掲注（13）冨田氏論考（八―一五頁）。

附記

本稿の執筆に際し、伊藤滋氏には収蔵品の実見の機会と多くのご教示を賜った。また、菅野智明氏・土屋幸子氏・松村茂樹氏にも多大なご教示を賜った。記して御礼申し上げたい。本稿はＪＳＰＳ科研費二六五八〇〇二三のによる成果の一部である。

（茨城県立水戸第二高等学校）